

手の跡が残るもの

なかおかようこ

最近のこの辺りでは、十年に一度の『どんぐり、椎の実の凶作』の煽りを受け、里に熊が降りてきて騒がしかった。雪が降り始め、熊も冬眠することができたのか、ぱたっとその話題は止んだ。ご縁があり、白山連峰に連なる裾野に住むようになってから、『自然』というものと『人の世界』というものの境界線が、このように身近になり、さらに目を凝らすことが増えた。

最初に自分がものを作ることに對して、『自然』と『人工物』の境界線の淵をうろうろしたいのだと気がつけたのは、間違いなくこのつちのいえに関わらせていただいたおかげだ。私が参加した時には、すでに大枝の土蔵は改修がだいぶ進んでおり、左官の作業辺りから一緒に手を動かすこととなった。さらにその派生の『緑の停留所』の展示に参加し、草編みの道を作った。

アースポイントというものをご存知だろうか。工事の道標となる杭で、わかりやすいように頭の部分が赤く塗られている。道路建設予定地を1人でフィールドワークしている時に、地面に体を伏せて視線を下げた時に、このアースポイントが連なり、人の営みを横断する道が立体的に立ち上がって見えた。昔からの山に続く参道も、丹念に育てている方の顔が見える柿畑も、豊かな土壁も、野面積みの石壁も。全てが横断される道の中。建設予定の地図上では読み解けない地形の起伏、豊かな人の日常。だったら私はその反対をしながら、この土地の記憶を編み込む道を作ろうと思った。地面の草が生えているなりに編み込む。阻むものがあれば、迂回する。切られる予定の柿畑で山口さんのインスタレーションの後、私の草の道を参加者で歩いて、『土地送り』をした。

何かの『記憶』を留める装置としての『芸術』。そうしたことに出会えたその時のメンバーと峠の茶屋を作ることは、大藪家の土壁の記憶を残すことから始まり、いまも続くつちのいえへと深化していった。

小さい時から秘密基地を作ることが大好きだった。家の中なら押し入れ、外階段の下空間、雑木林の中、葦の生い茂るところを結んだ中。友達と壁を作り、外界と遮断し、中で自分たちの宝だと思ふもの並べたり、見せたりする。光る泥団子や書いたイラスト。つちのいえは私にとってその秘密基地の延長だったと思う。峠の茶屋を作っている時、私たちは土壁や技法や素材や携わってくださる人たちの手のあとがキラキラして見えた。竹をとり、藁を発酵させ土に漉き込み固めて、Adobeの元となった干し煉瓦を作り、階段を作り、版築で壁を建て、再生と循環ということに感動し。最終的につちのいえは、様々な工法が取り入れられ、大枝の伝統的工法を残すというよりも、多国籍でおおらかなものとなった。初期メンバーの5人と時折訪れる客人と、この秘密基地を濃密に共有していった。その中では、感動したこと、美しいと思ったことを素直に伝え合え、感性の小石を見せ合いっこするような感覚だった。先生や生徒、先輩や後輩、京芸か他校か、全部を取っ払って存在する時間が流れていた。

大学を卒業し、この特殊な『村文化』を出たあとは、その感性を研ぎ澄ませながら生きていくことは非常に辛いときもあった。自分の握っていた感性の小石が、「ただの石だ」と周りの手ではたき落とされる前に、自らそっと手放してしまう方が楽だと気がついて

しまう日々も多かった。

その中で、『修復』にもう一度巡り合った時に、非常に落ち着くものがあった。何かから自分が表現をするというよりも、そこにあるものに寄り添ってみる。そのものの物語を掬い出して、提示してみました、というくらいのバランスが自分には向いているのだということ、歳を重ねるごとにさらにはつきりとしてきた。

工芸は『自然物』と『人工物』の間に技術が入り、作品となる。

土=自然物、土を握る=人工物、土を焼く=作品

人と自然の境界線、どう自然を切り取り整えるのか。私がつちのいえに惹かれるのは、頭の中の概念ではなく、土をとり、藁を切り、発酵させて粘りを出し、型に入れて固めて、どべで積み上げ、そうした行為の中から、人間も自然の一部でもあり、人間が扱える自然には限界があるということを知り続けられるからだろう。

最近知り得たばかりの知識で恐縮だが、熊騒動でわかってきたことは、私たちが「自然だ」と思っているものも人間の手が入っていたということ。それが生態系を壊していった過程。戦後、未来を信じて日本中に杉林を作った人々の想い。杉林が生態系を狂わしてしまったこと。日本は豊かな『自然』がある国だと信じていたその危うさ。

自然だから美しい、人工物だから美しくないというものでもなく、私は人の手の跡が残るものに愛おしさを感じる。そこには物語があるから。

境界は曖昧であるということ、歴然としてあること、悲しみではなく受容するものであるということ。そうしたことをぐるぐるとずっと卒業後も感じて考えることになったつちのいえにも、それを長い目で大切に育ててくださった恩師にも、そこで出会えた人、もの、事象の全てに感謝しかない。ありがとうございました。



土地の整備のために伐採した桜の枝はのちに卒業制作の作品となった。



2008~2011年参加
2011年大学院漆工専攻修了
大学院卒業後、アパレル会社でPRとして勤務。退職後、漆工芸天下香仙工房にて蒔絵の弟子入り。その後、蒔絵の修復技法を習うため、更谷富造に師事。現在は、金継ぎの仕事を中心に直しの仕事をしている。